

町の中心はどこだろう。

お店が並び、人が溢れ、人々が行きかう所。

以前は、交通の便利な駅前あたりがそうだったと思うが、現在では駅前に行っても店すらなく自動販売機がぽつんとある所も多い。駅前のアーケードがある商店街もシャッター通りになりつつある。現在では、人が多く集まり店が並ぶところは車で行ける大型店舗だろうが、これが町の中心だとは思えない。

現在では、町の中心が判りにくくなっている。

歩く時代の町の中心は判りやすい。

お城のある城下町ではお城である。道もお城から出ているし、お城に段々近づくとも町の雰囲気が伝わってくる。城下町ではその地域の町名が残っているが、その町名からも判る。魚屋町、栄町など古いイメージの町名もあるが、町の中心を探すなら「本町」あるいは「新町」などがピンポイントだ。

＊＊「柳」の付いた町名は色町・飲み屋などが多かったところだ。

大きな町なら本町1丁目、本町2丁目と続くが、もちろん1丁目が親分だろう。そして、その付近には町の中心らしい施設が登場する。地域の生活様式などで変わるが、商業が盛んな所は「銀行」、農業の盛んな所では「農協」、漁業の盛んな所では「漁協」、小規模な町や村では「郵便局」「小学校」などになる。鉄道が使われる所では「駅」が考えられるが、駅は町の家並みを避けた町はずれに設置されたので、町の中心からすこし外れている。

このような一般論は初めての現場では使えません。

町の中心はピンポイントで、「ここがそうです」と言える答えがあります。

「道路元標」のある場所です。

道路元標は、大きさが25cm角で高さが60cm程の石柱で大概是花崗岩でできていて、道の端にポツンと置かれています。

これは何かと言うと、この町の道路はここを基準にしますよと言う目印の石柱なのです。すなわち、町の中心なのです。

大正8年に日本で初めての道路法が出来て、全国の市町村にそれぞれ1か所設置されたものです。東京の日本橋にある日本国の道路元標が代表的なものです。長い間、道路の道端に設けられていたので、道路拡幅工事の際に復元されなかったり、交通事故で破損してそのまま消えたものもあります。それでも、藤原勝永氏の調査では兵庫県で今も半数が残っています。

「〇〇町道路元標」と書かれてある石造物を見つけたら、ここが町の中心だったと想像して下さい。当時の町が見えてきます。